

## スペイン独立戦争と「国民意識」

——カタルーニャに関する最近の諸研究を中心に

立 石 博 高

はじめに

「五月二一日の事件は、スペインの全ての地方に筆舌に尽くし難い憤激を引き起こした。そして全ての地方は自主的にそれぞれに備えていた部隊を武装させて、祖国（パトリア）の独立を擁護するために、フランス勢力に対する蜂起を開始した。」

これは、フランコ独裁時代（一九三九年～七五年）にスペインで版を重ねた『スペイン史概説』の一節である。<sup>(1)</sup> 五月二日の事件とは、一八〇八年のこの日、マドリードの民衆が、「フェルナンド七世万歳！」<sup>(2)</sup> 「ス人には死を！」と叫んで、同市に駐屯していたナボ

レオン派遣のミュラーの軍隊に対して蜂起したが、フランス軍によって過酷に鎮圧されたできごとを指している。上記の短い叙述から端的に窺えるように、伝統史学によつてこの事件は、「スペイン独立戦争」、すなわち、フランス勢力によつて祖国スペインを蹂躪された人々が自発的・自然発生的に愛国心から繰り広げた六年にわたる独立戦争の開始のできごととして描かれてきた。フランコ政権が人々の歴史意識を左右することに腐心していたことはヴィラールの鋭く指摘するところであるが、各地方が「宗教、国王、祖国万歳！」をスローガンに掲げて、ナポレオンの軍隊と戦つた「スペイン独立戦争」は、カトリック的伝統とスペイン

愛國主義の称揚にとつて恰好の材料であったのである。

しかしながら、こうしたかたちで「スペイン独立戦争」の「国民的神話」化が行なわれたことは、逆に、

スペインという近代国家が、二〇世紀に入つてもなお、「国民国家」としての統合を十分に達成できなかつたことの裏返しではないだろうか。<sup>(3)</sup>歴史的事実としての「スペイン独立戦争」は、近年の研究によつてますますその複雑さと多様性が明らかにされてきている。<sup>(4)</sup>ちなみに一九九二年五月に開かれた「五月二日」をめぐる国際会議では、この蜂起事件の自然発生的性格そのものが疑問に付されるばかりか、この事件と諸地方の蜂起の因果関係もあらためて問われている。<sup>(5)</sup>さらに、この戦争はその過程を通じてますます「無神論者ナポレオン」に対する抵抗とカトリック擁護という宗教的性格を帶びていつたとされるものの、当初このマドリード民衆の蜂起に対して教会当局や異端審問所は「卑しい民衆のけしからぬ騒擾」<sup>(6)</sup>として弾劾する態度をとつた事実が明らかにされるなど、ここでも神話の解体が大きく進展している。

一 「スペイン独立戦争」と「フランス人戦争」

一八〇八年から一八一四年にかけての戦争は、初めから「スペイン独立戦争」と呼ばれていたわけではないことは、ファンターナが明確に示している。<sup>(11)</sup>すなわち、同時代の人々は、スペインに侵入したフランス軍に対する蜂起であると同時に、カルロス四世とその寵臣ゴドイの専制政治に対して、王権を制約する新たな政体（コンステイトウシオン）を樹立しようとしたのであり、「蜂起」「戦争」という言葉の他に、とくに自由主義者たちは「スペイン革命」という言葉を使っていた。だがナポレオンによってフランスに止められたいたフェルナンド七世が、一八一四年五月に絶対主義的な国王復帰を果たすと、この戦争はフランス勢力によって篡奪された王位を取り戻すためのナポレオンに對する戦いにその意味を限定されて、「(反)ナポレオント戦争」という用語が好んで使われるようになつた。しかし、スペイン国家が旧勢力との妥協による「改革」によつて漸次的にアンシャン・レジームを廃棄して

こうした見直しの中で、フランコ体制の崩壊後、歴史的地域体ないし民族体（ナシオナリダード）と規定されるに至つたスペイン国内の諸地域、とくにカタルーニャが、「スペイン独立戦争」においてどのような「国民意識」を抱いたかということもまた問題にされてゐるにしても、それがいかなる階層といくなる地域の「国民」の意識であるのかを問うことが必要だからである。<sup>(9)</sup>そこで、本稿は、紙幅の制約もあることからカタルーニャに絞つて、最近の諸研究を検討するかたちをとりながら、カタルーニャの諸階層にとって反ナポレオンの戦争とはいつた如何なるものであつたのかを考察したい。何故ならば、スペインのなかで経済的・社会的に重要な位置を占めたカタルーニャという地域体の独自の意識と運動の展開を見ていくことによって、近現代史におけるスペインという「国民国家」の形成のあり方とその性格を考える上での極めて重要な示唆が与えられると思われるからである。

「国民国家」を打ち立てていく過程で、「スペイン独立戦争」という用語が定着していった。すなわち、ナポレオン戦争は「スペイン国民意識」の覚醒と高揚のできごととして理解され、またそのように喧伝されたのである。この点は、スペイン・ナショナリズムと歴史学解釈の関係を追つたシルハーノらの研究も確認するところである。<sup>(12)</sup>以後、現在まで「スペイン独立戦争」の名称は——その歴史的意味の評価は別にして——、ほぼ共通に使われている。

いま、「ほぼ」と述べたのは、実はカタルーニャでは、近年になつてますますフランス人に对抗する戦争として、「(反)フランス人戦争 (la Guerra del Francés)」という用語が使われるようになつてゐるからである。ファンターナは、この言葉が「民衆のあいだに起源を持つ」と言うが、いつ頃から使われだしたのかには言及していない。いずれにしろ、二〇世紀に入つて、スペイン・ナショナリズムの「国民意識」に対抗する形で、カタルーニャ・ナショナリズムの「民族体意識」——カタルーニャが独自の「国民国家」を形成

しようとする意識ではないので、ここではとりあえずこのように区別しておく——の強調とともに、カタルニヤの歴史家が好んでこの言葉「フランス人戦争」を使用するようになったことは間違いない。フランコ時代にあって社会経済史学の立場からマドリードの伝統史学を批判したビセンス・ビーベスもまた、晩年に是この用語を使っている。<sup>(13)</sup>

もともと、一九七〇年代までは、「スペイン独立戦争」の時期におけるカタルニヤの地域的特性が強調され、事件史としてはいくつかの実証的研究が現れるものの、カタルニヤ・ナショナリズムとの関わりでこの戦争の時期の人々の態度・意識を検証しようとする研究はほとんど見られない。おそらく、ソレ・トゥラに代表されるように、近代的カタルニヤ主義は、マドリードの政治支配に対するカタルニヤ・ブルジョワジーの自己主張として出発したと捉えられ、それ以前のカタルニヤ主義は保守的伝統と結びつくものであったとする解釈が支配的であったからであろう。<sup>(15)</sup>つい最近のカタルニヤ主義的な概説書のなかでも、

「フランス人に対する戦いは、(スペインと) 一体的であり、カデイス議会が召集されて最初の憲法が制定されたとき、カタルニヤの古くからの諸権利を擁護することもなかつた」といった記述がなされている。<sup>(16)</sup>

いわば階級的視点に立ったカタルニヤ主義の分析に対しては、ククルーアが歴史的伝統を重視する立場から批判を加えている<sup>(17)</sup>が、「スペイン独立戦争」をカタルニヤの民族体意識の形成のための画期と見る主張は、近年、有力になっている。バルセロナは、この戦争がアンシャン・レジームの崩壊にとってだけでなく、「カタルニヤ人の特殊な集団意識の発展」にとって「カタルニヤ人のエピソードであったと述べる。<sup>(18)</sup>一方、ブーチは、この戦争のあいだに「カタルニヤ主義の数々の表明」が見られるとして、反フランスという意味でのスペイン的一体性があつたとしても、同時にカタルニヤの差異と独自性、そして自治を要求する動きも存在したと主張する。<sup>(19)</sup>

こうして、「スペイン独立戦争」から「フランス人戦争」へと名称が変わることによって、カタルニヤ主

義の表明が重視されることになったが、その内実をきちんと検討しておかなければこうした解釈もまた、カタルニヤにとっての「歴史的神話」となってしまうだろう。その論拠とされるものをもう少し詳しく見よう。

## 二 「カタルニヤ主義」の表明

まずは、簡単に「フランス人戦争」の経過を追いたい。ゴドイとフランス政府のあいだに結ばれたフォンテヌブロー条約にもとづいて、ポルトガルへ進軍するという名目でフランス軍がカタルニヤに入ったのは一八〇八年二月九日で、バルセローナには同月一三日に駐屯を始めるが、二九日には突然シウタデリヤとモンジュイックの要衝を占拠して、事実上同市の占領を実現した。市当局および方面軍司令官はこれに逆らうことなく治安の維持に努めるに過ぎない。三月にはアランフェス暴動が起こってカルロス四世の退位と寵臣ゴドイの失脚、そしてフェルナンンド七世の即位が行なわれるが、五月から六月にかけて、ナポレオンは、

新たに自分の兄ジョゼフをホセ一世としてスペイン国王に即位させ、スペインのフランスへの従属さらには併合の意図を明白にした。引き続きバルセローナは、一八一四年春までフランス勢力の下におかれるが、占領を免れていた諸都市では、五月二八日に結成されたリエイダのそれを皮切りに、抵抗組織として地区評議会が結成され、やがて六月一八日には地区評議会の結集体としてカタルニヤ最高評議会がつくられた。しかし、戦闘はフランス勢力に有利に展開し、カタルニヤ最高評議会は各地を転々とせざるを得ず、一八〇九年一二月のジローナ陥落に次いで、リエイダ、トルトザ、タラゴナも降伏し、一八一二年にロシア遠征のためにナポレオン軍そのものが動搖をきたすまでは、有効な軍事的反撃を行なうことができなかつた。その後は、イギリス軍の支援を受けてスペイン正規軍が活動を盛り返し、ゲリラ戦も活発化するなかで、フランス勢力の支配域は次第に縮小していく、やがてその最終的撤退を迎えた。なお、一八一二年に制定された憲法の規定に沿って、同年一一月カタルニヤ地方議会

(111) スペイン独立戦争と「国民意識」

(ディエプタシオ・プロビンシアル)がつくれられ、カタルーニャ最高評議会は解散した。一八一四年五月のフェルナンド七世の復位によってこの制度も廃止されたことは言うまでもない。

さて、この時期のカタルーニャ主義を強調する歴史家が、フランス占領下の地域での親フランス派の人々の動きに注目している点は興味深い。なかでも一八一〇年、オジュロー元帥のもとで進められた行政改革を支えたトマス・ブーチの思想が注目されており、彼が中世カタルーニャの栄光と独自の伝統を擁護し、「カタルーニャ語は、カステイリヤ語(スペイン語)よりもずっと豊かで甘く、表現も豊富で思慮深いものだ」として、ナポレオン法典をカタルーニャ語に訳すことを積極的に進言したことが明らかにされている。そして、こうした言動を受けて占領行政に携わったフランス人は、「カタルーニャ人は、(カタルーニャ人としての)民族的誇りをもっており、彼らはスペイン人より勝っていると思っている。彼らのカステイリヤ人に対する怒りと憎しみは、表現の仕様もないほどで

そうした支配層——エリオットの言葉では「政治的国民」——が主張するカタルーニャ民族体の主張は、どこまで民衆レベルでの民族体意識と重なるのか、我々は十分に注意する必要があるのでないか。

そのことは、反ナポレオン側地域でのさまざまな表明についても言えることである。一八一三年に入つてカデイス議会において異端審問制度の廃止が問題となつたとき、この廃止に反対するカタルーニャ選出の議員たちの多数は、議論の中断を求める。その論拠といふのは、カタルーニャは伝統的に異端審問制度を支持しているので、予めカタルーニャに戻つて賛否を問う必要があるというものであった。これは、まさにアンシャン・レジーム的利害の擁護とカタルーニャ地域体の独自性の主張とが結びついたものであつて、このようなかたちでのカタルーニャ主義の表明のあつたことも我々は考慮に入れなければならないのである。<sup>(27)</sup>一方、同じようにカデイス議会の議員となつた稳健派のカプリーニは、「カタルーニャによって、あるいはガリシアによつて選出された議員はいても、カタルーニャの、

ある」といったことを本国へ報告したことが確認されている。<sup>(28)</sup>また、フランス支配地域では、カタルーニャ語で書かれた新聞が発行されており、カタルーニャ語化の進行が紛れもない事実とされる。<sup>(29)</sup>このことは確かに、スペイン王位継承戦争(一七〇二—一四年)で地域諸特権(フェロス)を廃止されたカタルーニャで、独自の政体と言語を復活させようとする意識が少なくとも一部の人々によって抱かれ続けしており、フランス勢力がこうした意識を利用しようとすることを示す。しかしながら、ナポレオン側のこうしたカタルーニャ意識への譲歩は、やがて一八一二年二月に行なわれた、スペインから切り離してカタルーニャをフランス内の四つの県とする領土併合政策の一貫であったことは間違いない。そしてこの際に、何故、反フランス意識が表明されなかつたのかを問う必要もあるだろう。一六四〇年代のカタルーニャの反乱では、反スペイン的カタルーニャ意識とカタルーニャ政体の独立性の強調は、社会的支配層にとつては民衆反乱が社会反乱に転化することを防ぐための道具であった。<sup>(30)</sup>

あるいはガリシアの議員はいない」と述べて、議員が「国民」の代表であつて、「あれこれの地方」の代表ではないことを主張している。<sup>(28)</sup>しかし他方で彼は、「これら(アラゴン人、バレンシア人、ムルシア人等々)の小さな諸国民(naciones)から偉大な国民(nación)が構成される」として、スペインの各地方がもつそれぞれの一体性が尊重されねばならないとする。

### 三 民衆と戦争

各地の民衆の蜂起について精力的に研究を進めているモリネル・プラダは、市町村の評議会の結成は、一方では、反フランスの抵抗を組織するためであるが——一様に「宗教、国王、祖国」をスローガンとして掲げている——、他方では、既存の秩序が動搖する中で民衆の動きをそうちした抵抗へと嚮導することによって社会秩序の温存を図るためであつたことを明らかにしている。<sup>(30)</sup>例えば、最初に結成されたリュイダの地区評議会は、全ての諸身分の代表二九人によって構成されリュイダ司教を議長とした。そして、「侵略者のた

めには鑑一文渡さない」と述べてフランス勢力に対する抵抗を毅然と表明したが、同時に、「騒擾と騒乱は無政府状態を誘うものである」として民衆の当局への服従と公安秩序の維持を強く要求した。さらに、カタルニーヤ最高評議会も、当初から、領主的諸貢租を含めてアンシヤン・レジームの諸権利と財産を擁護する立場に立っており、その結成後もなくして治安を維持し租税を徴収するために各地区に一五人規模の兵隊による警備を命じている。このように、抵抗組織<sup>(1)</sup>評議会と民衆とのあいだには利害対立と社会矛盾が含まれていたことに注意しなければならない。

また、モリネル・プラダは、こうした状況のなかで「カタルニーヤ主義」がスペイン正規軍への徴兵(キンタス)<sup>(2)</sup>への反対として表明されていると指摘する。すなわち、一八〇九年一月頃に流布した、「カタルニーヤの民衆よ、武器をとろう。我々の起<sup>3</sup>す轟音は、スペイン人将校や高慢なフランス人を脅えさせるだろう」と述べた「カタルニーヤの虎」の署名のあるパンフレット類に注目して、敗北を重ねるスペイン軍隊に

たカタルニーヤの伝統——カステイーリャの軍隊には徴募されないという特權——の回復要求が現れたと解すべきことを、いのことは示唆しているのである。

おわりに

六年間にわたる「スペイン独立戦争」の意味は、の

ちの歴史学によつて、あるいは「歴史的記憶」を現在に利用しようとする人々によつて、やがては解釈された。独立」という名称そのものが「スペイン国民意識」の高揚の意図と関わつて定着していくのである。やがて、「スペイン国民意識」に反発するカタルニーヤでは、「フランス人戦争」という用語を馴染みあるものにしている。いずれにせよ、この戦争は、アンシャン・レジームという社会矛盾をかかえつて生活する人々の生活圏に、名目はいかなるものであれフランスという外国の軍隊が侵入して、その生活を脅かすといふことができたとあつたとを忘れではない。当然のことながら、人々の抱く意識は、それぞれの社会階層的立場に応じて、反フランス的であつたり、反領主

失望して、かつての伝統であったカタルニーヤ民衆の武裝を要求することを表明したのだと捉えていい。<sup>(3)</sup>そして、民衆と正規軍の関係が悪化し、軍隊に徴兵されたカタルニーヤ人の脱走が甚だしかつたことを、カタルニーヤの独自性の主張のひとつとみるのである。<sup>(32)</sup>

しかしながら、民衆の逃避は、スペイン正規軍への徴兵だけにとどまらなかつたことをカナレスの研究は指摘する。彼は、フランス勢力に対する戦いの「一体性」、戦争の集団的偉業といったことを疑問視して、兵隊の徴募と免除、脱走などの具体的数字を追うといふ作業を進めるが、正規軍からの脱走が場合によつては部隊員数の三割にものぼつていたという事実を明らかにする一方、カタルニーヤ人自身が指揮した伝統的な民兵隊(ミケンサト)、予備隊、そしてカタルニーヤの抵抗の「神話」に常に言及される由縁団(ソメテント)の場合にも、脱走は一般的の現象であつたことを指摘する。従つて、民衆の兵役拒否という現象があつて、それがに重なるかたちで、スペイン王位継承戦争で失われ

制的であつたり、反徴兵的であつたり、反カステイーリヤ的——カタルニーヤの一部では——であつたりした。こうした諸意識の錯綜を統合するもの、それが、やしあたり「宗教、国王、祖国」であつたのだろうか。我々は、六年間の「戦争の悲惨」の実態に史料的に迫つていふ必要があるだらう。<sup>(34)</sup>

(1) Asíán Peña, José L., *Manual de Historia de España*, 9<sup>a</sup> edición, Barcelona, 1967, p. 255.

(2) Vilar, Pierre, "Prólogo a la nueva edición española", de su *Historia de España*, 6<sup>a</sup> edición renovada y puesta al día, Barcelona, 1978, pp. 8-10.

(3) いわゆる「カタルニーヤの抗争」が参考になれる。彼は19世紀スペインの抱えた構造的不均衡のへとつて地域的不均衡をあげている。Id., *La Guerre d'Espagne (1936-1939)*, Paris, 1986, pp. 14-21 (英訳『スペイン内戦』田水社、一九九〇年、一一一—二〇頁) を参照。

(4) やの全体的問題状況は「レバダ」 Morange, Claude, "La 'Révolution espagnole' de 1808 à 1814. Histoire et Escritures", dans *La Révolution française*

*et son 'public' en Espagne entre 1808 et 1814*, Paris, 1989, pp. 13-124 が参考となる。なお、「スペイン独立戦争」の歴史にカディスでは最初の近代議会が開かれた1812年憲法が制定された。このスペイン

(6) ロンガレス・アロンソは、「五月二日」事件がのちに神話化された大きな理由として、それがスペインの中央部の「首都」で起こった事件であったということ

開かれて一八二二年憲法が制定された。このことは、自由主義の動きについても従来とは異なって、その限界性を見ようとする評価が現れている。この点に関しては、拙稿「スペインの自由主義とカディス議会——『出版の自由』をめぐって」（遼塚忠躬他編『フランス革命とヨーロッパ近代』同文館出版、一九九三年一〇月刊行予定、所収）を参照されたい。この戦争の全体的経過については、拙稿「炎のイベリア半島——スペイン独立戦争とウェリントン」志垣嘉夫編『ナポレオンの戦争』（講談社、一九八四年、所収）で概観した。最近の優れた通史的成果に、Dufour, Gérard, *La Guerra de la Independencia*, Madrid, 1989 がある。この時期を含めて、スペインのアンソニ・レジーム解体期をめぐる諸問題と文献についてには、Aymès, Jean-René, "España en movimiento (1766-1814)."

を指摘してゐる。と同時に、この事件からアストゥリアス地方評議会の反フランス宣戰布告まで三週間以上が経過しており、中央から地方への抵抗の波及という図式は、事実維持として繰りだとしている。Longares Alonso, Jesús, "El 2 de mayo y su relación con la guerra y el levantamiento de las provincias", en *Ibid.*, pp. 425-436. もの一方で、モラレス・モヤは、バルセローナ・オリエンピックに表れたカタルーニャ・ナショナリズムに対抗して、いま現在、全国民族的な「歴史的追憶の場」としての「五月一日」の意義を強調したいとする立場の発言をしてゐる。Morales Moya, Antonio, "La Historiografía sobre el Dos de Mayo", en *Ibid.*, pp. 319-328. しかし p. 327 を参照。由起來本垂となつてもなお民族主義問題を抱える多民族・多言語の國様スペインの苦闷を表す言葉と言えようか。

Ensayo bibliográfico”, en *La Revolución Francesa y el mundo ibérico*, Madrid, 1989, pp. 19-159. <sup>15</sup>

(15) Espadas Burgos, Manuel, “El levantamiento del Dos de Mayo”, en *Actas del Congreso Internacional El Dos de Mayo y sus Precedentes*, Madrid, 1992, pp.

del segle XVIII, Barcelona, 1973, pp. 133-171 之所取)。まだ、フランス勢力＝占領者に対するペペイント人＝被占領者の抵抗と言つてゐるが、抵抗と言つて「日本」の背後に諸艦隊は、それぞれこれで最も大きなイメージを描かれていたりともいふ。イマーンは艦隊である。Id., "Quelques aspects de l'occupation et de la résistance en Espagne en 1794 et au temps de Napoleón", dans *Occupants-Occupés. 1792-1815*, Bruxelles, 1968, pp. 221-252 (カタノー＝リヤ編著も、*Assaigs*……, pp. 93-131 に所取)。彼によれば、「敵船船と血戦した艦隊船少數者たゞボーナンとアッシュマン・ルジームに対して回旋に戰つた。熱狂的大衆は、ナポレオンが突然の新しい体制を代表してくるが故にナポレオンに対して戦つた。フランス勢力の行なう徹底によって彼らへの憎しみと愛國心は駆り立てられ、1つの異なる特徴の政治的希望もますます大きくなつた。そして、社会の諸階層に通常見られるイデオロギーの傾向をもとに人々の多くが何な行動選択を分類するには必ずしも結論ではなかつた」 (*Assaigs*……, p. 121)

- (12) Cirujano Martín, Paloma, et al., *Historiografía y nacionalismo español*, 1834-1868, Madrid, 1985, pp. 190-194.
- (13) Fontana, *op. cit.*, p. 24.
- (14) カリーニョ・マリーン、カミーリー・カルラ・プハル、ヤイメ・ヒストリア・ポリtica・デ・カタルーニャ・エン・el・siglo・XIX、第1巻、La guerra de la Independencia、Barcelona、1957：Mercaider i Riba、Joan、Catalunya i l'imperi napoleònic、Barcelona、1978。

- (15) Solé Tura, Jordi, *Catalanisme i revolució burguesa. La tesi de Prat de la Riba*, Barcelona, 1967. フルス・ド・ラ・リバ、ソレ・トゥラ、ジョルディ、カタルーニャのブルジョアジーの反乱、1840年から1868年、バルセロナ、1967。
- (16) Cadena, Josep M., *505 fets bàsics de Catalunya*, Barcelona, 1989, pp. 115-116.

- (17) Cucurull, F., *Origens i evolució del federalisme català*, Barcelona, 1970. フランシスコ・クカルウル、カタルーニャの連邦主義の起源と発展、バルセロナ、1970。

- (18) Balcells, Albert, *El nacionalismo catalán*, Madrid, 1991, pp. 18-19. バルセロナ、アルベルト・バルセルス、カタルーニャの民族主義、マドリード、1991年。

- (19) Puig, Lluís Maria de, "Invasió napoleònica i Barcelona, 1989, pp. 115-116.

- (20) Solé Tura, Jordi, *Catalanisme i revolució burguesa. La tesi de Prat de la Riba*, Barcelona, 1967. フルス・ド・ラ・リバ、ソレ・トゥラ、ジョルディ、カタルーニャのブルジョアジーの反乱、1840年から1868年、バルセロナ、1967。

- (21) Solé Tura, Jordi, *Catalanisme i revolució burguesa. La tesi de Prat de la Riba*, Barcelona, 1967. フルス・ド・ラ・リバ、ソレ・トゥラ、ジョルディ、カタルーニャのブルジョアジーの反乱、1840年から1868年、バルセロナ、1967。

- (22) Sarrión i Gualda, Josep, *La Diputació provincial de Catalunya sota la Constitució de Cadiz (1812-1814 i 1820-1822)*, Barcelona, 1991. ジオルジ・サリオン・イ・ガウルダ、カタルーニャの省議会（1812-1814と1820-1822）、バルセロナ、1991年。

- (23) Puig, Lluís Maria de, "Invasió napoleònica i Barcelona, 1989, pp. 115-116.

- (24) Solé Tura, Jordi, *Catalanisme i revolució burguesa. La tesi de Prat de la Riba*, Barcelona, 1967. フルス・ド・ラ・リバ、ソレ・トゥラ、ジョルディ、カタルーニャのブルジョアジーの反乱、1840年から1868年、バルセロナ、1967。

- (25) Solé Tura, Jordi, *Catalanisme i revolució burguesa. La tesi de Prat de la Riba*, Barcelona, 1967. フルス・ド・ラ・リバ、ソレ・トゥラ、ジョルディ、カタルーニャのブルジョアジーの反乱、1840年から1868年、バルセロナ、1967。

- (26) Elliott, John H., "Revolution and Continuity in Early Modern Europe", *Past and Present*, no. 42, 1969, pp. 35-56. ジョン・エリオット、初期現代ヨーロッパの革命と連続性、『過去と現在』、第42号、1969年。

- (27) Roura i Aulinás, Lluís, "Hi hagué algun protocatalanisme polític a Cadis?", *L'Avenç*, núm. 113, 1988, pp. 32-37.

- (28) *Ibid.*, p. 34.

- (29) Fontana, *op. cit.*, p. 180. カリーニョ・マリーン、カミーリー・カルラ・プハル、ヤイメ・ヒストリア・ポリtica・デ・カタルーニャ・エン・el・siglo・XIX、第1巻、La guerra de la Independencia、Barcelona、1957：Mercaider i Riba、Joan、Catalunya i l'imperi napoleònic、Barcelona、1978。

- (30) Moliner Prada, Antonio, "Movimientos populares en Cataluña durante la guerra de la Independencia", *Estudios de Historia Social*, 22-23, 1982, pp. 23-40. アントニ・モリネル・プラダ、カタルーニャの独立戦争中の民衆運動、社会歴史研究、22-23号、1982年。

- (31) Moliner Prada, Antonio, *La Catalunya resistent a la dominació francesa (1808-1812)*, Barcelona, 1989. カタルーニャのフランス占領に対する抵抗、バルセロナ、1989年。

- (32) *Ibid.*, pp. 53-57.

- (33) *Ibid.*, pp. 60-61, 91-97; Id., "Las repercusiones ....", p. 452.